

紹 介

角川地名大辞典編纂委員会編：北海道 上・下 巻

角川書店，1988年，1654・1407頁，19,200円

本書は府県別地名辞典の一環として出版されたもので、総ページ数3000をこえる大冊である。本書には専門委員として、自然・人文地名の項目選定に参画したいきさつもあり、内容とその特色について紹介してみたい。

本大辞典成立の経緯については「編纂のことば」や「刊行の辞」でふれられているので、それに譲るが、まさに吉田東伍の「大日本地名辞書」に比肩しう内容と質を備えているといえる。北海道の地名に関してはこれまでも「地名大事典」や「大百科事典」などの類書もあり、それぞれ特色のある内容を構成しているが、本書は22,000におよぶ立項数と、その構成上の特色において他に類を見ないといえよう。

本事典は総説、地名、地誌、資料の各編よりなっている。とくに総説では本州とは異質の構造と過程をもつ北海道の歴史が和人によるアイヌ民族の支配と中央政権への編入を中心に展開されており、これによりアイヌ語地名の変化と和人地名成立の歴史的背景を理解することが可能となっている。

また資料編には北海道の地名の特色の一つとされ、語源ともなっている多くのアイヌ語や中央政権の支配を表現する原野や御料地などの独特な地名についての解説がされている。

ついで地名編では歴史的行政地名が古代・中世、近世、近現代の三つの時代区分毎に比定され、しかも史料にもとずく解説が加えられているため、いわば「地名を軸とした歴史集大成」とも見ることができる。北海道の歴史的特異性からみて、古代・中世の地名を欠いており、大部分が近世より始まっている点が特性となっているが、また対照的に近現代までに消滅してしまったオタビリ（石狩町）などのような地名をも知ることができる。同時に近代以降では同語源の地名でも行政上の性格が異なる場合には、別に立項されており、行政地名の変遷をたどることができる。

たとえば、「あふた」は近世では「場所」地名としてのアプタが、明治初年—35年の二級町村制成立までの虻田村、同35年—昭和13年の一級町村時の虻田村、同13年より現在までの虻田町の3回の変遷が知られる。

自然・人文地名は全体でおよそ1500項目が立項されたが、その経緯についてふれると、当初は全道の20万分の一の地勢図をもとに15分と10分の経緯線によって区分された区画内の関連する項目を総て抜き出し、さらに旧版の20万

分の一、5万分の一、その他既製の地図等を対比させて、呼称位置や名称などの変化を調べた。また項目の遺漏を防ぐため、これまでの事典と立項についての比較をおこなった。また人文地名の一部は他の専門家の選定によったが、その他はこれまでの各種史料を参照して選定した。地名の歴史的变化を重視している本辞典の方針に沿って、自然・人文地名でもすでに消滅した釧路鉄道や殖民軌道などのほか、雄冬山道などの道路の採項などにも配慮した。

これらのうち100項目をこえるのは山や山地、台地と川、谷と人文地名の道路、鉄道、駅などである。これらの立項に当たっては必ずしも標高や流長などの物理的な基準にこだわらず、歴史的な意義を重視した。他府県のものに比べて紙幅が増加されているが、広大な地域を扱っているため、他府県では立項が可能なミクロスケールの地名を欠いている点があるが、本州と比較すると峠、用水、浜、浦や文学に拘わる地名は少なく、北海道の歴史の特性がこの種の地名の数に反映されて居るように思われる。他方でチャン地名は北海道の特性を表すものとなっている。また東大雪、三六などの通称や別称など、他の類書ではふれられることがなかった地名の立項も見られる。

ついで地誌編では全道212市町村（札幌市は7区別）にわたって現況、立地、歴史行政地名と同じ三時代区分による沿革のほか現行行政地名が網羅されている。しかも執筆は地元の史家、研究者によっており、とくに沿革の項は市町村の歴史の要約となっており、極めて有益である。そのうえ現行行政地名も歴史行政地名との関連を知ることができる。

このように地名の多角的な分析ができるようになっており、しかも読者の関心に応じて多様な利用の仕方が可能なように思われる。特に地理巡検の資料や地域学習の教材作りの際には本辞典の価値は大きく、現地との対比をとうして、その意義はさらに高まるであろう。

個人はもとより、とくに学校図書館への配架をお勧めしたい。（山下 克彦・北海道教育大学札幌分校）